

## 北満の記録(六) 收容所その二

### 友の死

降雪はさほどなく、寒であつたが、シバレは厳しい。大陸性気候がはつきりして、三寒四温が決まったように来るので、慣れて来ると行動も、それにつれて動きが変わる。

食料も一番少ない時など、一食分のパンが小マツチ箱二個分位の大きさしかなく、一口で食べられる大きさで、とても食事と言うものではない。酷寒の中、ノルマの上らない伐採作業で、パーセントも上がらず、そのため食糧の支給も少なく、栄養失調になり、倒れたりした者もいた。

同じ班の仲間で、あまり丈夫でなかつた彼であつたが、普段から

「あまり無理をしないように」と、みんな注意をしていた。風邪ぎみもあつたようだが、ある朝少し元気がない。

「どうした熱があるのか」

「いやない」

「大丈夫か」

「大丈夫。体したことはない」

「無理するなよ」

「いや大丈夫だ」

そんな会話を交わしたが、彼はいつものとおり伐採の仕事にかけた。組が別なので別れ際に

「あまり無理するなよ」

と別々の方向へ別れた。作業が終わり、帰途気にして見ると、彼はかな

り疲労している様子、班の仲間と左右から励ましながら帰宿した。

彼は夕食も取らず横になる。栄養失調と疲労だけでは、ソ連の軍医は診療してくれないのだ。我々にもどうしてやることも出来ないのだ。分かつているのは本人だけなのだ。

我々に出来ることと言えば、励まし元気づけることだけ、時々額に手を当て熱があるかどうかを見るだけなのだ。ちょうど、隣同士で寝ていたので、時々夜中に様子を見る程度、その内にこちらも日中の疲れですっかり寝込んでしまう。

翌朝起床の声をさます。皆、むくむくと起き上がるが、隣の彼は起きない。

「おい大丈夫か……」

体を揺するが返事もない。毛布を開き、外套を開いてみると、彼は冷たくなつていた。

互いに体を突き合わせての、狭いところで寝て居ながら、隣で死んでいるのが分からない有様だ。夜中に苦しんだのだろうか、何か言いたい事はなかつたのだろうか。

部屋の者も状況が分かつていただけに、栄養失調症と疲労が重なつた死亡と、ソ連側に連絡する。ちょうど、中隊にお寺の息子（美幌町出身者）がいて、経を唱えることができると言うので、その人と戦友四、五人が、当日の作業から残してもらい、山まで運び、茶毘に付した。

お骨を拾つて、墓を作り墓標を立てる。我々が毎日山の伐採に通る道端に丁重に葬つた。我々といつも共にいて、少しでも寂しくないというせめてもの友情から。普段から体の弱い者、意志の弱い者がその頃集中して倒れていった。

ここに来てからは、軍隊の階級などはどうにもならないのだ。気力と体

力だけがものをいう環境なのだ。後は腕と知恵だ。生きて行くという事の苦しみを味わいながら、一日、一日が長い闘いであった。

この頃になると、帰国、日本に帰してくれるという事は、誰の口からも聞かれなくなつた。ソ連側の扱い方により、当分の間は帰さないであろうと、諦めてしまったのである。

## 盗み

大勢の中には、悪いものもいる。自分さえよければと、他の者の事は一切考えずに、悪い事をする。

朝食の時、昼食のパンが支給され、布に包んで腰にぶら下げたりして、朝の集会にでる。

部屋の中は薄暗く、狭いので出るときはかなり混雑する。その際を狙つて腰のパンを盗むのだ。少しの距離で、ちよつとの時間だが、これが盗つた者が全く、分らないのも不思議であつた。大の男が仲間から、パンの一切れを盗つて食べる、その浅ましき。

班ごとに飯上（受領）のとき、飯盒ごと盗られた事がある。これは何人かで組んでやる事らしかつた。この空飯盒も見つからなかつた。悪いやつは次第に分かるようになり、みんなから警戒される。ある一人はあまりにも悪賢く、仲間のみんなを苦しめるので、現行犯で捕らえると言つて警戒し、ある日捕まえる。

体格の良い元氣のいい初年兵だつた。先輩からこつぴどく責められ、人の生き血を吸うようなやつは、只では置けんという事で、上下下着だけにして、手足を縛り酷寒の外へ出す。

凍える寸前に部屋の中に入れ、その繰り返しだ。食事は何日も与えず、

死の苦しみを味あわせて本当に改心するまでやり、何日目かで本人は、皆に泣いて土下座して、謝つて許してもらつた者も居たが、そんな厳しい仕置きをされた者もいた。

酷寒の山中で食糧も乏しい重労働の毎日、気力と体力だけが頼り、いつか来る年、帰る日まで、何が何でも頑張らなければならぬ今……。

大勢の中で、生き抜くことは大変だ。異国の地の果て、これから先どのような事になるか、今までの状況から判断して、すぐに帰国できる事は望めず、であれば北海道の酷寒地で、鍛えたこの体力で、帰国できるその日を楽しみに、一日一日を闘い抜くだけ、戦友今は働く仲間だ。

個人的な仕事は少なく、ほとんど二人以上の組の仕事であり、一人のサボりも許されない。

能率の向上と相互の協力が、如何に大切かを思い知らされる。伐採も進むにつれて如何にしたら楽をして早く木が倒せるか、枝木を焼却できるかを会得するようになり、余裕が出てくる。

伐採に危険はつきもの、これからも何本か切り倒すうちに、玄人はだしの技を身に付ける様になる。それにもまして危険なのは、凍傷であつた。各人の凍傷に対する自覚と、相互の注意力が必要となり、耳鼻が一番凍傷になりやすく、凍傷になつた時はすぐ処置をする。時を過ぎると大変な事になる。しかし、この伐採中、松の実のお陰で、どれほど我々の体力が救われた事か、測り知れない。

生きるための重労働と、寒さとの闘いの毎日だつた。二月に入り、現地形の大木はほとんど切り倒され、見通しがよくなり、すっかり明るくなった。所々に幹の直径が二メートルもあるような大木が残り、二組くらいでこれを伐る事になる。

大変な仕事だ。その頃になるとソ連側より、トラクターが持ち込まれ、

倒木の集積が始まる。十メートルから二十メートルもある長い倒木を、一度に五本から十本も牽引して、集積地まで運ぶ。

トラクターの響きが御して、山は急に賑やかになる。集積地では他の仲間が、材質により一定の寸法に伐り揃え、寸法別に山積みされていく。日毎に集積地は材木の山となつて行く。

伐採が終る頃、先に切り開き丸太組の橋を作つた所に、別動隊が我々の伐採作業中に、線路を敷き、何時の間にか貨車が数十台入つている。しかも、集積地の土場は復線化している。いよいよ、貨車に積み込みである。

伐採班は今度、貨車積み班と共に土場近くの倒木の集積である。土場近くの倒木は地形が藪地のため、凹凸が多くトラクターが入れず、人力での運び出しなのである。二メートル〜五メートルで、直径が三十センチ〜八十センチ内の丸太を人力で、然も藪の中は凸凹の地形なのだ。冬期で凍結しているだけ辛い。

重さにより四人〜十人位で担ぐのである。担ぐといつても、ロープを回し両方から天秤で担ぐのである。並の体力では、出来ない労働だ。

地形の悪い所では転がしたり、テコを応用して一寸吊りをしたりして動かす。あまりの重労働のために、積み込み班と一日交替で作業をする。貨車積みも、これまた大変な労働だ。すべて人力なのだ。貨車の上へ上げるのも、一段二段の内は簡単に上がるが、上になるにしたがい、臨台の傾斜が急になり、押上げ巻上げが大変、両方の呼吸が合わないと、途中で臨台、あるいは貨車の上から、落下してしまうのだ。

落としたら危険だし、再び臨台の先まで持つて行くのも大変だ。何をするにも、満足な道具が与えられないので、それぞれ工夫した道具で間に合わせで、ここでは人力が優先だ。一日に五台〜十台の積み込みで

ある。

夕方、四暗までに積み終るように作業を進め帰舎する。翌朝八時頃土場に着くと、先日積み込んだ貨車はなく、空車がちゃんと入っている。我々が帰つた後か、朝来る前にすべて入れ替えが終つているのだ。

何処でどのような連絡を、行なつてこの行動がなされているのか、だれも分からなかつたし、一度も機関車の入れ替え作業を見なかつたのである。何とも謎めいた話なのである。

貨車積みで一番困つたのは手袋の破れと、その補修であつた。ロープを引いたり、丸太を転がしたりする時に手袋が濡れて凍れてしまい、すぐ破れてしまう。休みの日は布を使用して、ボツコ手袋を作つたり、手袋の補修をしたりで、一日が終るほど。補修は大切な仕事であつた。

若し破れた衣服や手袋など身につけていると、破れ目から寒さが浸透して、凍傷になるのだ。体の一部肌が「むずがゆい」「痛い」と感じた所が破れていたり、穴が開いていたりすると、そこはもう凍傷になつているのである。それほどシベリアの寒さは厳しいのだ。

夕暮れ時の寒さは、全身が凍結するのではないかと思うほどで、とてもじつと立つてはいられない。常に体中を動かしていなければ、耐えられない寒さの時もある。

## 収容所 (二)

貨車積み作業になると、列車が毎日来るので、食糧事情も幾分良くなつてきたので、この寒さに耐えることが出来たのかも知れない。三月の初め頃までに、伐採の残務作業も終わり、貨車輸送で集積地の丸太も無くなり、この収容所での作業の終了となる。作業終了と同時に将校は

別の収容所に移される。中隊ごとに分散移動することになる。

三月のある日、我々もトラックに分乗し他地区の山中の収容所に移動する。自動車で一目の移動であったが、今までよりまだ山の中であることに違いない。何処をどう走ったのか、地形は全く分からない。北か、南か、地形、谷間、小川（氷結）の状況からして、今までいた収容所より、高地であることは確かである。

森林地帯であるが、今までの山地と違い、木の種類も全く違う。北海道というエゾ松、トド松の原始林の中である。昔、営林署に勤めていた頃、冬山造林作業に従事していた頃を思い出す。

それはど、山中の木の種類が似ている。まるで、北海道の山の中にいるような錯覚さえ覚える。

この収容所は規模も小さく柵も普通のもの一張りだけ回されているだけで、四百平方メートルくらい。入口に監視兼炊事場のような建物、一方奥の方に長い二棟、これが我々の新しい宿舎だ。

未だ余り年数も経っていないようだ。中は幅が三間程あるが、高さが低くて寝台は二段なので、頭がつかえるようだ。一日部屋の掃除や、身の回りの片付けなどで、後はゆつくり休む。

次の日から初仕事だ。宿舎からほど近い山に行くと、太さ三十〜五十センチメートルの松の丸太が、山積みになっている。ソ側の話では、この丸太は、ヤポンスキーが伐り出したものとの事、ほかの部隊の兵隊がここで伐採をして、別の所へ移動したのであろう。トラックが来るから、それにこの丸太を積み込むという作業だ。

九時頃になると、トラックが次から次へと来る。運転手は兵隊も居れば、一般人のような人も居る。山積みされて居る丸太が道路より一〜二メートル高く、段差があるので、積み込みも楽だ。

車の台数は何台あるのか全く分からず、ソ側チケットの受渡しで決まって居るようであった。初めのうちは積み込みも近くて早いが、だんだん道路から遠くなり、大変な作業となる。場所によっては貨車積みのように長い台を渡して積むので、相変らず苦勞が多い。

ソ側の輸送作業も急いで居るようだ。暖気になると、凍結のため通行が出来た道路も使用不能になるために、四月中旬までには全部終わり人も引き揚げなければならぬのだ。

三月の終り頃、春の大雪があり四十センチの降雪となる。雪が降るとトラックが来ないので、仕事が出来なくなるが、それより大変なのは、食糧が来なくなることである。二、三日続いた雪降り、食糧も底をつき、ソ側の監視兵の食物も無くなり、急遠近くの団体から、馬鈴薯が馬に積んで届けられる。朝から何も食べずに部屋で寝ているだけ。動けば腹が減る。

我々の中から元気なものを選んで、食糧を取りに行くと、ソ側に交渉をしても、危険が多いので駄目だとの事であった。やっと届けてきたソ側の人も、雪が止まないと危険で、絶対駄目だとのこと。届けられた馬鈴薯も一日分をやっと満たす程度。

夕食、やっと食べ物にありついた。しかし、拳の半分くらいの薯が二個ずつだった。一日の食事が馬鈴薯たった二個だけ……。次の日も乗馬で輸送が行なわれ、一食、芋二個。

朝、昼、晩、これが三日続いた。体力も減退する。四日目に、やっとパンと穀物が入った定食にありつける。

食糧が来るということは、道路も除雪され開通したことになる。さすが芋二個の食べ物では、ソ側も働かせなかった。むしろ、将校や下士官が宿舎に来て、動くお腹が減るから、寝ているとさく指導にやって来

た。

食糧が来るとつぎの日から作業が始まる。降雪で遅れた作業で、今度は夜九時頃までトラックが来るので残業となる。

四月の上旬になると、日当たりの良い所はポカポカ気持ちが良い。南向きの大木の根元の雪も溶け出す。その頃になると、ほとんど残務整理ばかり。

ソ側の職人や監視兵などから、よく言われた。

「お前たちは山で一所懸命働いたので、今度は町の工場へ行って、働くのだ」とのこと。

あるものは羊美を作るような工場との話だったとか、噂に噂がひろまりうまい話ばかり。酷寒の中での重労働を切り抜け、春を迎え仕事にも慣れ、明るさが戻ってきた頃であった。

話は明るいものばかりで、希望も出てくる。四月下旬、現地作業完了、次の収容所へ出発。

トラック（幌付き）に分乗して出発する。外を見ることは出来ず、途中用便のため止まるだけ。食事は乗ったままパンを食べ、何処をどう走って何処へ連れて行かれるのか、一切分からない。初め一緒に出発した車も途中でバラバラになり姿も見えない。夕方暗くなり、広い空き家のような所へ入れられ、一泊夜明けと同時にまた出発する。

どうやら町も近くなったようである。ホロの中なので外は見えないが、車の揺れ具合や、音で分かる。車同士の擦れ違いが多くなる。

車がや々と停まる。目的地なのか、おもむろに下車する。

### 第三収容所

昼近い天気の良い日だった。

ほとんどの者は既に着いて、旅装を解いていた。我々の車の後に二、三台次々に到着する。此処はどうやらハバロフスク郊外のようなのだ。

辺りを見ると、まばらに民家らしい小さな家が、荒野の丘陵地の一角にあった。低い鉄条網が回され、あまり広くない敷地で、工場か倉庫の跡のような建物で、これが我々の第三収容所であり宿舎なのだ。

遠くに工場らしい建物が所々にあり、稼働しているようで、煙が上がっている。四方が遠くまで見え、山らしきものは全く見えず、我々が今まで居た山は、何処にあったのか見当も付かない。太陽の方向を見て、自分の位置と、頭の中にあるシベリアの地図で判断し、現在地がどの辺りなのか知るのみだ。

北北西の方向に少し大きな建物が見える。もしかしてハバロフスクかも。部屋の中は天井が高い。二段ベッドがずらりとならんでいる。時候は春、今後住む所としては快適なようだ。此処へ着いた頃は、雪も目陰にあるだけで、すっかり春。此処でそれぞれ数カ所の作業場へ分散される。すべて此処からの通いである。

収容所から作業所まで、監視兵に連れられて行き、現場へ着くと、それぞれ責任者の指示で仕事をする。自分たちが行った所は工場であり数年前より使用していなかったとのこと。

指示に従い、工場内の片付けと機械の分解清掃であった。責任者の手まねの説明で、レンガ加工場であることが分かる。

## 煉瓦加工場

二、三日で工場内の機械の整備も終り、試運転となる。誰も経験のない煉瓦作りだ。

初めソ側の職人の指示通り機械を動かすが、材料の土に水の混合割合が悪く、柔らかかったり、硬かったり、苦闘する。此処の地名はクラシノ・レーチカといい、ハバロフスクは北へ数キロの所にあるらしい。

極東地区第一の重要な中心都市である。機械の扱いにも慣れて来て、いよいよ本作業となる。以前は極東一の生産工場だったとのことで、設備や敷地もさすがに広い。

戦争で長い間閉鎖になっていた町である。材料の土も広く深い谷の様に掘られていた。そこから三百メートル近いベルト・コンベアー二基で上まで運ばれる。すべての工程を日本人だけで始められたのである。

コンベアーで上部室へ入った土に、適量の水が自動的に注入され、ドラムの中で練られ、圧縮機の中を通り、押し出されて来る。

ちよつと超特大の羊羹の帯のような形で、艶もよく見た目にも美味しそうな代物である。山から移動するとき「お前たちは今度街へ行って、羊羹のようなものを作る工場へ行くのだ」と言っていたことを思いだす。

なるほど、これは本当に羊羹である。食べられないが。押し出されてくる帯状の固形が一定の間隔で止まり、自動または半自動（手動）で切断され、送り出される。これが生レンガである。

これを一個ずつ附着しないように、トロッコに載せて乾燥場へ運ばれる。乾燥場は広い緩やかな傾斜地にあり、縦横に乾燥柵が並びトロ線がその間を縦横に敷かれている。

全ての柵に番号が付いていて、何時に作られたものかすぐ分かるように

なっている。

トロッコの上下は交互になるようになっていく。日に日に技術も上がり、待遇もよくなり、能率も上がる。調子よくなると仕事にも欲が出て、各人の担当作業も競争となる。

百五十メートル位下台は平地になっていて、そこに大きな窯場がある。乾燥したレンガを今度は一番下の窯へ運び込む。この窯場は小判型をした大きいもので、窯はそれぞれ単独で、一周十個が並んでいる。一窯五百〇千個のレンガが積み込まれ、焼き上げられるのだ。

十番目に積み込まれる頃には、一番窯は冷やしも終り、出来上がって窯出しが始まる。初めは五割位の欠損が出たが、積み込み方法や、火入れの焼き方も巧くなり、一〇二割の欠損という上出来となった。ソ側職人の指導もあつたが、日本人特有の考案で、早い技術の習得のお陰だ。

日産、月産とも極東一の生産量を上げるようになり、他の工場や、ソ連上層部から見学に来るほど、有名工場となる。

このようになると、さすが労働者の国、警備の監視兵も名目だけ、労働者（仲間）としての扱い。待遇も山にいたときとは、天と地の差である。我々の要求は何でも聞いてくれる様になる。

また、日本人の力、意気を見せてやれ、ソ側の労働者に負けるな、との全員の気持ち一致団結した成果だ。重労働も慣れてくると、仕事も楽になり、楽しみながらするようになる。

仕事は全工程が五日〇七日の交替制で順調に行なわれた。戦争から解放され、労働にも慣れ、楽しい充実した毎日であった。